

臨床研究センター 特別職務担当教員(教授) 就任のご挨拶

大阪医科大学附属病院 臨床研究センター
特別職務担当教員(教授) 藤阪 保仁



この度、令和2年8月1日付をもちまして大阪医科大学附属病院 臨床研究センター特別職務担当教員(教授)を拝命いたしました。

“新薬開発は次世代標準治療を探索するのみならず、現在の標準治療を再発見する”を信念に、臨床・研究・教育に取り組んでおります。

私は1998年(平成10年)に大阪医科大学を卒業し、同年より母校の第一内科(第3代教授 大澤 伸昭先生)に入局し、医師として患者さんに果たすべき責任の重さを教えていただきました。学生時代より、私たちの精巧な免疫システムから逃れる“がん細胞”とは何者なのか、なぜ宿主を死に至らしめてしまうのか、がん細胞に意思はあるのだろうかと哲学じみた自問自答をよくしていました。そんな思いから、がん治療を内科医として専攻したいと強く思っていたところ、国立がんセンター中央病院(NCCH)(現:国立がん研究センター中央病院)のレジデント試験があるので応募しなさいと陸上競技部の先輩でもある呼吸器内科の福田康樹先生よりお声かけ頂きました。東京でしょうか…と少し戸惑った私に、合格してから心配しなさいと、喝を入れられたのをまだ鮮明に覚えています。当時、Medical Oncology(臨床腫瘍学)はまだ一般的ではありませんでしたが、幸いにも2000年より腫瘍

内科医としての1歩を歩み出すことができました。各臓器のがん薬物療法、緩和・支持療法、病理学、放射線治療・放射線診断を徹底的にたたき込まれたうえで、臓器横断のがん診療を学びました。この非常に厳しい修練中に特に深く刻まれたのは、患者さんの意向に沿った医療をより良く提供するため標準的治療に加え、効果的かつ安全な新規治療薬を患者さんに届けていくための方法論、すなわち臨床研究(特に介入試験である臨床試験・治験)の適切な実践です。患者さんの権利尊重を基盤に、科学的かつ医学的臨床的に意味のある研究の重要性を学びました。特に2003年からはNCCHの内科治療開発部門のチーフレジデントとして現NCCH副院長の山本昇先生の指導の下、ヒトに初めて薬剤候補を投与するPhase 1試験を担当し多くの分子標的治療薬を世に送り出すお手伝いが出来たこと、日本および世界の新薬開発に携わる関係者との人脈を築けたことはかけがえのない財産となっております。

その後、大阪医科大学第一内科(花房俊昭教授)呼吸器内科 助手、近畿大学腫瘍内科学講座(中川和彦教授)講師を経て、黒岩敏彦病院長にお声かけ頂き2013年より竹中 洋先生、林 哲也先生、後藤 昌弘先生が築いてこられた大阪医科大学附属病院臨床研究センターのセンター長として赴任いた

しました。診療・臨床研究面では呼吸器内科・呼吸器腫瘍内科において肺癌を中心とした胸部悪性腫瘍の治療、早期開発臨床試験を担当しております。分子標的治療薬開発が全盛を迎える2010年前後より新薬開発は急速なグローバル化が進み、施設(大学・病院)、地域、国の垣根を越え連携して治験・臨床試験が進められており、新薬の開発は単独施設のみではもはや行うことは難しくなりました。赴任後すぐに、EGFR遺伝子陽性肺癌のEGFR-TKIへの耐性を克服するオシメルチニブを世界20施設の1つとしてPhase 1試験に参加できたことは、臨床試験・治験体制整備の大切さとグローバル製薬企業が求める施設基準の厳しい世界標準を知る良い機会だったと思います。全国からの問い合わせを頂く緊張感に包まれたなか、当院の若手医師達も患者さんの、がんを克服するための新薬への熱い期待をしっかりと感じとれたと思います。現在では、BNCTをはじめとする各領域からの医師主導治験・企業治験が増加し、今後の成果が期待されています。ここ北摂“高槻”から世界に向けて、新しい薬や医療機器の迅速な開発を目指される研究者の先生方の支援を臨床研究センターのスタッフと共に進めて参ります。

専門とする胸部腫瘍の領域では、集学的治療の進歩により難治癌の1つであった肺癌も長期生存が得られる時代が到来しています。これは、特に薬物療法の領域では、がん免疫療法の導入や分子標的治療・ゲノム医療の深化、さらにはそれらを支える支持療法の発展に寄るところが大きいと思います。不可能

にも思えた転移を有するような進行肺癌の圧倒的治療成績の向上が、Driver Mutationを標的とした分子標的治療薬、免疫チェックポイント阻害剤の臨床導入によりもたらされました。このような薬物療法の大きなパラダイムシフトが可能となるような薬剤開発にも今後も積極的に取り組みたいと思います。

このたび特務教授を拝命することで今まで以上に広くご指導頂ける機会が増え、先生方の想いを強く心に刻みながら診療・研究・教育に携われることに本当に感謝申し上げます。各分野のプロフェッショナルがそろった当院の強みを十分に活かし、より一層、新規治療の開発支援に力を注ぐとともに、さらなる大学、病院の発展、地域医療への貢献、後輩の先生方の育成のために尽力いたします。今後ご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。